様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２４９５

研究課題名（和文）『リア王』第一・四つ折り本のシステマチックな編集に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Systematic Editting of the First Quarto of King Lear

研究代表者
辻　照彦（Tsuji, Teruhiko）

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：３０１９７６７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：『リア王』の第一・四つ折り本(Q)と第一・二つ折り本(F)のテクストに見られる異同について、それらの多くがQの印刷業者による恣意的な編集・校訂の結果として生じたのではないかという仮説に基づいて分析を試みた。その結果、Qのテクストは、矛盾する台詞の解消、文法的逸脱の標準化、古語の言い換えといった点で、当時の印刷本としては異例なほど広範囲に編集・校訂作業が施されたテクストであることが明らかになり、オリジナルな仮説の有効性を証明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
シェイクスピアの有名な悲劇『リア王』には2種類のテクストが存在し、両テクスト間におびただしい相違点が生まれた原因については長年研究者を悩ます謎とされてきた。本研究は、古い方のテクストはその印刷業者によって例外的なほど全面的に編集・校訂されたテクストであるというオリジナルの仮説によりこの難問に挑んだものである。本研究は、オリジナルモデルの有効性を証明したにとどまらず、今後進められるであろう『リア王』テクスト問題の全容解明に向けた作業を方向付けるものになることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study has focused on the textual variation between the First Quarto and the First Folio of King Lear, based on the original hypothesis that part of the variation resulted from the arbitrary editing and emendation on the part of the printers of First Quarto. Through close comparative analysis of the texts, including the Second Quarto, the present researcher has demonstrated that the text of the First Quarto shows a considerable amount of evidence for emendatory intervention in terms of contextual integration, grammatical standardization, and synonym substitution.

研究分野：人文学

キーワード：『リア王』　テクスト問題　First Quarto　First Folio　推定的校訂

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．　　研究開始当初の背景

1608 年に出版された『リア王』の第一・四つ折り本(Q)と、1623 年に出版された初のシェイクスピア全集である第一・二つ折り本(F)に収録されたテクストの間に見られる異同は、そのスケールの大きさと、原因解明の困難さから、シェイクスピア作品の中で最大のテクスト問題となっている。すでに 100 年以上も前から、『リア王』の Q の原稿は出自に問題があり、観客が密かに役者の台詞を速記してまとめたものとする速記説や、一部の役者が、記憶を頼りにまとめた臨時用台本に基づくものとする記憶再構成説が提唱されてきた。1980 年代は、『リア王』のテクスト問題に注目が集まった時代で、当時、Q は初期の草稿に基づくもので、F は、シェイクスピア自身による大規模な改訂が施された改訂テクストであるとする作者改訂説が多くの研究者によって提唱された。作者改訂説はテクスト問題を解決する切り札として期待されたが、その後『リア王』の Q と F に見られる複雑な異同を説明する仮説としては、その有効性に様々な問題があることが明らかになり、『リア王』のテクスト問題は再び袋小路に入ってしまった。

２．研究の目的

本研究の目的は、シェイクスピア作品中でも最大規模の異同が存在する『リア王』第一・四つ折り本（Q、1608 年）と第一・二つ折り本（F、1623 年）のテクスト問題に焦点を当て、長年シェイクスピア研究者を悩ませてきた異同発生メカニズムの問題について、従来とは全く異なるモデルを用いてアプローチするものである。それは「Q＝編集テクスト」というアイデアで、かつて海賊版ともみなされていた Q が、作者のオリジナル原稿に印刷業者が手を加えて、システマチックに編集されたテクストであるとする仮説である。本研究は、テクスト間の異同を網羅的・包括的に分析することにより、Q の編集の手法と特徴を明らかにするとともに、印刷業者がそのような大胆な介入をした意図を解明しようとするものである。

３．研究の方法

『リア王』第一・四つ折り本(Q)に見られるシステマチックな編集は 4 つのレベルに分類することができる。それらは、①台詞の主が書かれている頭書き(Speech Prefix)の編集、② 3 行以上の比較的分量のあるパッセージの編集、③ト書き(Stage Direction)の編集、④台詞内の語句の編集である。本研究では、『リア王』全編を通して随所にみられる語句表現の異同に特に焦点を当てている。そして、Q と F に見られる多数の異同を詳細に比較分析することにより、第一・四つ折り本に見られる表現の多くが、一定のパターンのもと、印刷業者により意図的に書き換えられたものであることを証明しようと試みた。

４．研究成果

本研究では、最初に頭書きの例を取り上げながら、『リア王』第一・四つ折り本には印刷業者によって編集が施されているという新しい仮設の成立可能性を確認した。さらに、台詞内の表現に関する異同について網羅的に分析を進め、第一・四つ折り本の印刷業者がシェイクスピアのオリジナル原稿に施した編集作業のパターンを明らかにしていった。より具体的な研究成果は次のとおりである。

（１）頭書き変更の痕跡

まず、『リア王』第一・四つ折り本のテクストに印刷業者によって加えられた変更の痕跡が存在することを確認するために頭書き(Speech Prefix)の異同に注目した。『リア王』の第一・四つ

折り本と第一・二つ折り本のテクスト間には、頭書きの異同が 20 か所以上も存在し、その半数近くが最後の 5 幕 3 場に集中している。 頭書きの異同については、従来、第一・四つ折り本を印刷した際の、植字工による誤植が主要な原因とされてきたが(Ian Duthie, King Lear, 1949)、本研究では、第一・四つ折り本の頭書きが、印刷の際に、何者かにによって意図的に変更された可能性を探った。特に注目したのは、①1 幕 4 場のリアとケントの頭書きの異同、②2 幕 4 場のリアとゴネリルの頭書きの異同、③5 幕 3 場のリーガンとエドマンドの頭書きの異同である。これらの例を詳細に分析することにより、第一・二つ折り本の頭書きがシェイクスピアの書いたオリジナルであり、それが何者かによって第一・四つ折り本に見られるような頭書きに意図的に変更された可能性が高いことを明らかにするとともに、編集者的な人物が、オリジナルの台詞の割り振りを変更するという大胆かつ独断的な介入をする場合、その意図としてはどのような事情が考えられるかを考察した。

（2）矛盾点解消のための編集

『リア王』第一・四つ折り本に見られる編集・校訂の痕跡の一つとして、明らかに前後の文脈と矛盾した発言を削除したり訂正したりする傾向、つまり、不整合を可能な限り解消しようとする編集者の傾向を分析した。対象としたのは、例えば次のような箇所である。

① リーガン夫妻の旅について、第一・二つ折り本では夜を徹して移動したことが強調されている表現が、第一・四つ折り本では時間の表現が削除されている。
② 第一・二つ折り本では、リアがグロスター邸を出発する際に馬を使用したと説明されるが、第一・四つ折り本ではその表現が欠落している。
③ 第一・二つ折り本ではエドマンドが指揮しているのが「イングランド軍」となっているのに対して、第一・四つ折り本では「ブリテン軍」となっている。
④ 第一・二つ折り本では、第 4 幕第 1 場冒頭の独白で、エドガーは、最低の境遇にまで落ちぶれてしまった人間の逆説的な強さを語るが、第一・四つ折り本では、その中の嵐への言及が欠落している。

研究代表者は、いずれのケースも、第一・二つ折り本の表現には前後の文脈や、他の台詞との関係で矛盾点が含まれていることを指摘し、それらを他のシェイクスピア作品の事例と比較した。その結果、そのような無頓着さはシェイクスピアの作品には比較的高い頻度で見られることであり、そのような欠陥を含んでいる第一・二つ折り本の表現こそ、むしろシェイクスピアのオリジナルである可能性が高いことが分かった。さらに、変更後に新たにテクストに生じることになった不具合を分析することにより、第一・四つ折り本に見られる、矛盾点や 不整合が解消された表現が、実は第一・四つ折り本の印刷業者による仕業であることを示した。

（3）文法的標準化のための編集

『リア王』第一・四つ折り本に見られる編集・校訂の痕跡の一つとして、文法的標準化に焦点を当てて分析を継続した。この編集作業は、明白に文法的に逸脱した表現を標準的な表現に書き換える行為である。本分析のきっかけとなったのは、『リア王』の重要なテクストである第一・四つ折り本（1608 年）と第一・二つ折り本（1623 年）のテクストを比較するとき、例えば『ハムレット』のケースと比べて、文法に関係する異同が極めて多いという発見である。本研究では、それらの異同を網羅的に分析することにより、従来、杜撰なテクストとされてきた第一・四つ折り本の方が第一・二つ折り本よりも文法的により標準的になっているという一見不思議な傾向が見られることを明らかにした。さらに本研究では、いくつかの例を詳細に分析することにより、

第一・四つ折り本の編集者が文法的標準化という校訂作業を行った可能性を探った。例えば次のような例である。

① 単数形の主語の場合、動詞や代名詞は単数形であるべきだが、しばしば複数形の動詞や代名詞が使用される数の不一致の問題。

② 二重否定という、論理的には間違いだが、否定を繰り返して強調しようとする逸脱表現の問題。

③ 主格の関係代名詞は省略できないが、特に関係節の動詞の直前に先行詞がある場合にはしばしば省略される問題。

これらの点に注目してみると、『リア王』の場合、第一・四つ折り本の表現が文法的に標準的になっていて、第一・二つ折り本の表現が非標準的になっていることが多い。本研究では、いずれのケースもシェイクスピアのオリジナル原稿では第一・二つ折り本のように非標準的になっていた可能性が高いことを韻律の分析や他の作品に見られるシェイクスピアの文法的逸脱傾向を参考にしながら論証し、第一・四つ折り本に見られる一見文法的に標準的な表現は編集者の校訂作業の産物である可能性が高いことを明らかにした。

（４）同義語置換の編集

最後に、『リア王』第一・四つ折り本に見られるもう一つの重要な編集作業である同義語置換、すなわち、古風な単語や珍しい意味の単語を、より一般的な表現に置き換える編集作業について分析した。はじめに、Q1 の印刷本が印刷所原稿として使用された『リア王』の第二・四つ折り本（Second Quarto、1619 年）の同義語置換の例を確認し、印刷本が原稿として使用された場合でさえ、職人による恣意的な編集作業や推定校訂が行われたという事実を明らかにした。続いて、『リア王』の Q1 と F のテクストに見られる異同のうち、同義語置換が疑われるケースをリストアップした。それらを分析した結果、同義語ペアのうち、F の方がより珍しい単語であるか、特別な意味で使われている単語になっていることが多いことが分かった。さらに、重要な例をいくつか取り上げて（例えば、２幕２場のコーンウォールのセリフに見られる colour (Q)と nature (F)、５幕３場のゴネリルの傍白に見られる medicine (Q)と poison (F)などのペア）、シェイクスピアの他作品に見られるそれらの単語の使用例と比較したり、文脈にける表現の妥当性や韻律の乱れ等を詳細に分析した。その結果、シェイクスピアがもともと自筆原稿に書いたのは F の単語であり、それが Q1 の印刷所関係者によってより一般的な単語に書き換えられた可能性が高いことを明らかにした。Q1 に見られる同義語置換もこれまでに分析してきた矛盾点の解消や文法的標準化のための編集作業と方向性が一致しており、テクストから読者が違和感を持ちそうな要素を可能な限り取り除きたいというのが印刷業者の動機であったと考えられる。

以上のように、本研究では、「Q＝編集テクスト」というオリジナルな仮説に基づいて『リア王』のテクスト問題にアプローチしたわけだが、第一・四つ折り本(Q)と第一・二つ折り本(F)のテクスト間に見られる異同を網羅的に分析した結果、異同のかなりの部分が、実は第一・四つ折り本の印刷業者による恣意的な編集作業に起因することが明らかになった。文法的標準化や同義語置換の例の分析からわかるように、印刷業者による編集作業は作品全編を通してシステマチックに行われている。また、頭書きの変更や不整合の解消の例からわかるように、編集作業は単に表面的なレベルだけでなく、より深い内容レベルに達するときもあった。今回の研究により「Q＝編集テクスト」というオリジナルモデルの有効性を証明することができたと考えている。本研究の成果は、今後進められるであろう『リア王』テクスト問題の全容解明に向けた作業を方

向付ける、重要な出発点を提供できたと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 辻照彦	４．巻 第13巻第2号
２．論文標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる同義語置換の痕跡に関する一考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 229-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻照彦	４．巻 第108号
２．論文標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる文法的標準化の痕跡に関する一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 新潟大学経済論集	６．最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻照彦	４．巻 第106号
２．論文標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる校訂の痕跡―不整合を解消する傾向	５．発行年 2019年
３．雑誌名 新潟大学経済論集	６．最初と最後の頁 177-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 辻照彦	４．巻 22
２．論文標題 『リア王』のテクストに見られるSpeech Prefixの変更に関する一考察	５．発行年 2018年
３．雑誌名 新潟大学言語文化研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 辻照彦
2．発表標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる文法的標準化について
3．学会等名 第38回エリザベス朝研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 辻照彦
2．発表標題 シェイクスピアの読者が残した痕跡―Jean-Christophe Mayer 著 Shakespeare's Early Readers を読んで
3．学会等名 第36回エリザベス朝研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 辻照彦
2．発表標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる同義語置換について
3．学会等名 第33回エリザベス朝研究会
4．発表年 2018年

1．発表者名 辻照彦
2．発表標題 『リア王』第一・四つ折り本に見られる編集の痕跡
3．学会等名 第29回エリザベス朝研究会
4．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

書評 Jean-Christophe Mayer, Shakespeare’s Early Readers: A Cultural History from 1590 to 1800 (Cambridge University Press, 2018), Shakespeare Studies Volume 58, pp. 29-31, (The Shakespeare Society of Japan, 2020)

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関